

アドネ・ル・ロワ『大足のベルト』における母親観 ——（１）母親達の役割

川口 陽子

はじめに

1960年にフィリップ・アリエスが『<子供>の誕生』を発表して以来、「子供」、「子供期」に対して関心が向けられるようになり、中世についても様々な研究が行われてきた⁽¹⁾。中世文学研究に関しては、例えばD・D・ベルクヴァン(1981)やJ・N・ファーボルク(1997)により、諸作品を網羅的に取り上げ、子供達や親達の姿を浮かび上がらせる研究がなされてきたが、しかしその一方で、一つの作品を取り上げ、その中で親達がどのような役割を担っているのか、親であることがその人物にどのような影響を与えているのか、延いては、彼らの姿を通して作者・語り手は何を伝えようとしているのかを論じた研究はまだ少ないように思われる⁽²⁾。それは、主人公が既に成長し、親元を離れた段階から物語が始まり、彼らの親達はほとんど姿を現さない、また、主人公が物語中で親となることも少なく、あったとしても後日談であり、物語を通して親達の姿を追い続けることが難しいためであると考えられる。さらにベルクヴァン(1981)は、「全くの成り行き任せで選んだ物語や叙事詩、約100作品において、最初に注目すべきことは、母親達と子達の両方、あるいは一方がこれらの作品の80%において、然るべく描写されているということだ」、「機会が訪れるや否や、主人公達が受胎された状況や家族を描くことが、作者達の気に入る」と指摘しつつも、「子供期と母性が主要なテーマではないことは本当である」⁽³⁾と認めている。しかし、親である人物が長い間物語に姿を現し、しかも重要な役を演じている作品がないわけではない。その例として本稿では、13世紀後半の宮廷詩人

アドネ・ル・ロワの『大足のベルト』を取り上げる。この作品には、女主人公の両親を始めとして何組もの親子が登場する。主な親子関係としては、ハンガリー王フロワール、王妃ブランシュフルールと娘ベルト⁽⁴⁾、奴隷女マルジストと娘アリスト、森林監督官シモン、その妻コンスタンスと二人の娘達エグラント、イザベル⁽⁵⁾を挙げることが出来る⁽⁶⁾。その結果、自ずと親達に関する言及も多くなる。その中でも母親達、特に娘との関係における彼女達の役割は重要である⁽⁷⁾。また、アドネは「全ての役者達、端役でさえも、彼らの運命を徹底して調整することに執着している」⁽⁸⁾と、A・アンリ(1982)は述べているが、そうであるとすれば、彼の登場人物達の親としての一面においても、彼なりの意図が込められていることは想像に難くない。したがって以下では、『大足のベルト』に登場する母親達に焦点を絞り、子達に対する、特に娘達に対する彼女達の役割・在り方を分析し、その姿を通して、アドネが考える「理想の母親像」に迫りたい。

1. 母親達の役割

この物語には5人の母親が登場する。ベルトの母ブランシュフルール、アリストの母マルジスト、ペパンの母、エグラントとイザベルの母コンスタンス、そしてランフロワとウドリの母アリストである⁽⁹⁾。以下ではまず、女主人公の母ブランシュフルールを取り上げて分析し、その後、他の母親達に関して、彼女と比較しつつ考察を行い、彼女達が担っている母親としての役割を明らかにする。

1-1. ブランシュフルール

ブランシュフルールが物語に初めて登場するのは、ペパンからの使者がベルトをペパン王妃にと求めに来た場面である。ハンガリー王フロワールは彼らに賛同し、「王妃ブランシュフルールは、娘を呼びにやらせた」(v.124)。この箇所から、娘の指導は母親の領域に属することが確認される。

縁談話がまとまった娘の出立に先立ち、ブランシュフルールは彼女に3人の奴隷達マルジスト、その娘アリスト、その縁者チベールを付き添わせることを提案する

(vv. 185-188). そして、ザクセンまでベルトを見送り、帰国することになった彼女は、別れの際、娘を神に委ね、「学識のある者にも世俗の者にも愛されるようにするのです」(v. 213), 「明るく陽気にしているのです」(v. 218) という助言を与える。これらの発言は、娘に対して母親が果たすべき責任を表すものである。

母としての責任感、フランス王妃の悪評を耳にした時のブランシュフルールの決意にも表れている。娘に会いにフランスへとやって来たブランシュフルールを待ち受けていたのは、フランス王妃をこの世に送り出した母を呪う人々の声だった(vv. 1728-1729). 「人々から彼らの物を卑怯な手段で取り上げる」(v.1745) という娘の悪評を耳にして、母は「(国に) 戻る前に、彼女を正してしましましょう、／彼女が所有している物をすっかりと、彼女に返させるようにして、／そのことで、貧者は貧しく、酷い扱いを受けています」(vv. 1750-1752) と思う。さらに、ハンガリーから出立した時には「善良さに満ち満ちており、／アキテーヌの港に至るまで、それ以上に躰られた者はいなかった」(vv. 1785-1786) はずの娘の変貌に心を痛めては、「大いなる優しさによって、正しき振る舞いへと彼女を導かれんことを」と神に祈る。要するに、ブランシュフルールにとって、王妃として正しい道を娘に歩ませることは、母親としての義務なのである。

したがって、娘の指導に対する責任を負う母親は、娘にとって模範でなければならない。嫁ぐ娘へ父フロワールが手向る言葉「母に似るのだ」(v. 139) に、そのことは集約されている⁽¹⁰⁾。

母としてのブランシュフルールは、感情豊かである。例えば彼女は、遠き国へと嫁いで行った娘に会えないことを寂しく思い(v. 1582), 「私達が彼女 [=娘] を愛する者達であるという様子を、十分には示していません」(v. 1697) と夫に言って、彼女に会いに行く許しを求める。また、ベルトを失ったことを知った時の彼女は、「心から大層辛い思いをしている母であった」(v. 2350). そして、ペバンからのベルト発見の報に、彼女は夫と子ども「喜びに非常に心奪われ、」(v. 3005), 「喜びからすっかりと気を失った」(v.3007). ベルトに会いにル・マンへとやって来た彼女は、「娘への愛ゆえに、心を乱し」(v. 3040), ベルトと再会するや、「喜びのあまり気を失って、地面に倒れ」(v. 3095), それから「立ち上がり、彼 [=夫] の両手か

ら（娘を）取り、／何度も飽くことなく彼女に接吻し続ける」（vv. 3101-3102, cf. v. 3147). このような彼女の姿は、娘を「深く愛している」（v. 3284）母としての愛情の表れに他ならない。娘の言葉の中で「優しい母」（v. 216）、「優しく愛しい母」（v. 561, v. 3406）と呼ばれるブランシュフルールは、何よりもまず、情愛深い母なのである。

偽王妃の存在に気づいたブランシュフルールは、「ここで私が見つけたのは、少しも私の娘ではありません」（v. 2128）と叫び、掛け布団を掴んで強く引っ張り、偽王妃の足を確認し、その三つ編を引っ張って地面に打ち倒す（vv. 2127-2153）。この大立ち回りは、娘を奪われた母としての彼女の怒りと悲しみの発露であり、彼女の母としての愛情の深さを一層強く印象付けることだろう。

コリオ（1970）は、この物語において「善の側を具現する」⁽¹¹⁾ブランシュフルールを「何よりもまず母である」⁽¹²⁾と指摘し、「賛嘆すべき母」⁽¹³⁾と呼び、彼女は「母の愛」⁽¹⁴⁾を象徴していると言う。このように、愛する心と強い責任感を持って娘の指導にあたる彼女の姿に、我々は、アドネにとっての「理想の母親像」を垣間見ることが出来るだろう。

1-2. マルジスト

慈愛に満ちた王妃ブランシュフルールの対極に位置し、「悪の側を具現する」⁽¹⁵⁾裏切り者の奴隷女マルジスト。コリオ（1970）は、彼女を「罪を犯した母」⁽¹⁶⁾と呼び、「犯罪」⁽¹⁷⁾を象徴していると言う。また彼女は、物語における最初の言及において「あの奴隷女 *la serve*」（v. 159）と呼ばれるが、この箇所での定冠詞の使用は、読者・聴衆が既に物語を知っていることを想定し、彼女による裏切りを予感させるものである⁽¹⁸⁾。さらに彼女は、ブランシュフルールにより買い戻され、奴隷の身分から解放されており（vv. 189-190）、正確には元奴隷であるにもかかわらず、語り手からも登場人物からも「奴隷女」と呼ばれ続け、常に社会の最下層に位置付けられる。この点に関してコリオ（1970）は、「奴隷という素性は、道徳的欠陥に結び付けられた、消すことの出来ない破廉恥さという汚点を構成しているように思われる」と指摘し、「奴隷身分からの買戻しは、元奴隷の側からの無条件の忠誠をもたらす。そこからマルジストの犯罪の恐ろしい性格が出てくるのだ」と続ける⁽¹⁹⁾。では、語

り手からも登場人物からも呪われる、恐るべき裏切り者の奴隷女マルジストは、母親としては、どのような人物であったのだろうか？

マルジストに関する最初の言及は、娘アリストに関する説明「あの奴隷女の娘」(v.159)の一部を成す。これにより、この親子においては、母親が娘の社会的階級を表す存在であることが理解される。これは、ベルトが何よりもまず「ハンガリー王の娘」(v. 108)として紹介される、つまり、この親子の場合は、父親が娘の社会的階級を表す存在であることと対をなす。この点において、マルジストはブランシュフルールにおいては見られなかった役割を担っている。

遠い異国へと嫁ぐベルトに付き従ったマルジストは、婚礼の晩、ベルトと自分の娘アリストのすり替えを企む。上手くベルトを丸め込んだ (vv. 311-336) マルジストは、アリストの前に「非常に嬉しげな顔つきで現れる、／彼女は自分の娘を抱きしめ、そして、彼女の顔に接吻」(vv. 348-349) し、「お前をととても大切に思っています、／だって、お前は王妃になるのだから」(vv. 352-353) と言う。ここにいるのは、娘の成り上がり＝幸運を想像して喜んでいる母である。その後、王妃に成りすました娘が富んでいくのを目にして、彼女は「ますます陽気になり、楽しくなり、嬉しく思うようになった」(v. 1490)⁽²⁰⁾。そして、ブランシュフルールのパリ到来の知らせに動揺する娘を前にして、彼女はブランシュフルールを呪い、娘を神に委ね、慰める (vv. 1824-1829)。このように、母親としての彼女は、娘への愛という点において、一見、ブランシュフルールと同じに見える。しかし、二人には大きな違いがある、それは、母を喜ばせる娘の振る舞いが、道徳的に正しいかどうかという点である。フランス王妃による悪政を耳にしたブランシュフルールが、娘の矯正を決意するのに対して、マルジストにとっては、どんな手段によってであろうと、娘が富を手に入れるのであれば、それは喜ばしいことであり、娘の不正を助長させる。確かにマルジストもまた娘を愛する母ではあるが、その愛し方は間違っている。

間違った母の愛は、間違った方向に、つまり犯罪へと娘を導くことになる。彼女は娘に、王妃すり替えに関する指示を出し (vv. 368-378)、過酷な税の取立てに関する助言を与え (vv. 1474-1488)、パリに到着するブランシュフルールを欺くべく、仮病作戦を企てて指示し (vv. 1808-1010)、さらにはブランシュフルールとペパンの毒

殺さえも提案する (vv. 1831-1834).

これらは全て、娘を幸福にしなければ、裕福にしなければ、守らなければという、母親としてのマルジストの責任感を表している。そのような流れの中では、ベルトを森へ連れて行き、殺し、その心臓を持ち帰るようにチベールに指示し (vv. 545-549)、ベルトの心臓と偽って差し出された猪の心臓を喜んで受け取る (vv. 672-678) 残虐な姿においてさえも、娘アリストの成り上がり＝幸福を完全なものにしたいと思う母の心が伺われるように思われる。しかし、このように娘のことを思えば思うほど、彼女の目指す方向は人の道からますます外れていく。この点において彼女は、娘の間違いを正そうと思うブランシュフルールとは対照的である。

パリに到着したブランシュフルールによる偽王妃の発覚を阻止しようと、マルジストは手を尽くす (vv. 1996-2016, vv.2033-2037)。だが、ブランシュフルールの娘に会うという固い決意 (vv. 2039-2042) を聞き、マルジストは「もう少しで心臓が割れるのではないかという程の恐怖を感じた」(v. 2044)。この恐怖について、コリオ (1970) は次のように指摘する。「彼女は自分のためだけではなく、娘のためにも震えるということ認めなければならない。全く動物的であるが確かな母の愛は、マルジストの唯一賞賛すべき感情である。アリストが公に母を否認することになる恩知らずであるのに、マルジストは自分の子を守るためには何でも、望みのない解決策でさえも試みるつもりである」⁽²¹⁾。要するに、恐ろしい犯罪者も、慈悲深い王妃も、娘を愛する母であるという点においては何ら変わらない。しかし、道徳的欠陥を有する母が娘に対して抱く愛は、彼女を、延いては彼女の娘を、誤った方向に導いていく。そして最後に、人としての道を踏み外した母は、正しき母の前に屈することになる。マルジストとブランシュフルールという2人の母親達を比較する時、裏切り者の奴隷女マルジストは、「理想の母親像」の対極に位置する「反面教師となる母親像」、「悪しき母親像」として描き出されているという印象が残るだろう。

1-3. ペパンの母, コンスタンス, アリスト

最後に、物語に長くは登場しない、あるいは、母として描かれることの少ない3人の母親達について見ていく。

物語冒頭において繰り広げられる、ペパンによるライオン退治の武勇伝には、彼の母も姿を現している。彼女は夫シャルル・マルテルに連れられ避難していたが、息子ペパンがライオンを倒すと、「喜びの涙を流し始め」(v. 74)、何故そのような行為を思い立ったのかと彼に尋ねる。この描写は非常に短いとはいえ、息子の無事に安堵する母の暖かい愛を感じ取らせるには十分なものであるだろう。

森林監督官シモンとその妻コンスタンスの二人の娘達エグラントとイザベルの姿は、森の中ですっかり凍え、大層空腹だったベルトの世話にあたる (vv. 1231-1234)、物語での最初の登場時以来、ほとんど常に母親の傍らに見出される⁽²²⁾。また、ベルトを気に入り、ベルトが去るならともに去るとエグラントが告げに行くのは、母の下にである。これらの箇所から理解されるのは、母と娘の絆の強さであり⁽²³⁾、娘達の保護者にして指導者という母親の役割である。

「聖女」ベルトの対極に位置する「何の疾しさも覚えぬ野心家」⁽²⁴⁾アリストは、偽王妃として過ごした日々の中、ペパンの息子達ランフロワ、ウドリの母となる。女主人ベルトを裏切るという母の言葉に何の反対もせず (vv. 354-360)、母の助言により偽王妃として悪政を敷き (vv. 1474-1488)、悪事が露見すると、全てを母になすりつける (vv. 2289-2293) アリスト、彼女もまたその母同様、道徳的欠陥を有する人物として描かれる。そのような彼女ではあるが、息子達のことを思う時には他の母親達と変わらない。ブランシュフルールのパリ到着の知らせに、裏切りの発覚を恐れる彼女は、母とチベールに逃亡を提案する (v.1838)。その際、「私の2人の子達はここ、彼らの父の下に残しましょう、／彼らは死に値するようなことをしていません」(vv. 1845-1846)⁽²⁵⁾と彼女は言うが、この発言は単なる「子捨て」を意味するものではない。むしろそれは、父親としてのペパンに対する彼女の信頼の念を表しており⁽²⁶⁾、さらには、父母の離別に際して、どちらの下にいるほうが子達にとって幸せかを考える母の愛と責任感をも感じさせる。それを踏まえた上で、ウドリを世継ぎにと求めに来たフロワールの使者に対するペパンの返答「彼 [=フロワール] に伝えられたい、私 [=ペパン] の息子ウドリなしに、／彼の母は1日たりとも絶対にいられないだろう」(vv. 1650-1651) に立ち戻ると、コリオ (1970) が指摘するように、「これは口実であるかもしれないが、アリストは自分の側に息子達を

引き止め、あらゆる手段で彼らを可愛がろうと配慮しているように、非常に思われるのである⁽²⁷⁾。このように、子を愛する母としてのアリストに目をとめる時、「彼女は決して悪い母親のようには見えない」⁽²⁸⁾のである。

しかし、指導者としての母という点から見ると、アリストはその母に似ている、つまり「理想の母親」ブランシュフルールとはかけ離れているように思われる。物語の中で、彼女が息子達に助言を与えたり、指導したりする場面は描かれていない。だが、長男ランフロワは「欺瞞に満ちて」(v. 1468) おり、次男ウドリは「罪深く、妬み心に満ちて」(v. 1469) おり、二人とも「残忍で邪な者達」(v. 1493) であり、「その後、これら2人によって、多くの人々が国を追われ、／多くの裏切りが企てられ、追求された」(vv. 1471-1472) と、物語は語っている。このような息子達に関して、コリオ (1970) は「裏切り者で偽りの奴隷達の世代が存在すること——たとえ父が王家の生まれであろうとも、悪しき奴隷女の母と祖母からは、悪しき卑劣な子達しか生まれることが出来ないだろうことを、我々は知る」⁽²⁹⁾と述べている。しかし、ベルトがこの上なく良く躰けられたことを鑑みると、奴隷という血筋の問題に加えて、息子の傍らにいたであろう母の指導力不足も否めないだろう。要するに、その母により人として誤った道を進むことになった娘は、さらにその子達を誤った方向へと導くことになったのだと考えられるのである。

* * *

以上のことから、この物語に登場する母親達が担っていた役割は、1)「愛情を持って子に接する」、2)「保護者として、指導者として、子に対する責任を負う」の2点に纏められる。特に結婚前の娘達に対しては、彼女達が母親の側にいるだけに一層、母親の第2の役割がその重要性を高めることになるだろう。そして、母親達は皆、社会的階級による違いも、善人か悪人かによる違いも越えて、等しくこれらの役割を担っている。しかし、道徳的欠点を有する女性達が母である場合、子達は誤った方向へと導かれ、その母同様、邪悪な道を進んでいくことが理解された。そして、二つの役割のどちらにおいても、ブランシュフルールは理想的な姿として描か

れており、我々は彼女を通して、少なくとも、アドネにとっての「理想の実母像」に触れることが出来るのである。

これらの役割に加えて、マルジストは「娘の社会的階級を表す存在である」という役割も担っていた。しかし、これは他の母親達と共有するものではなく、彼女に特有のものであり、したがって、それは彼女に固有の状況に由来するものと考えられる。この点については、後に述べることにする。何故なら、この点こそが、彼女の裏切りの重大な要因となっていると考えられるからである。

注

本稿は、2004年度日本フランス語フランス文学会関西支部大会（2004年11月27日於神戸大学）における口頭発表「アドネ・ル・ロワ『大足のベルト』における「親」」に修正加筆したものである。

- (1) 中世における子供・子供期に関する文献としては、引用したもの他に以下のものを参照した。ALEXANDRE-BIDON, Danièle, LETT, Didier (1997), *Les Enfants au Moyen Age, V^e-XI^e siècles*, coll. <La Vie Quotidienne>, Hachette. / CARRON, Roland (1989), *Enfant et parenté dans la France médiévale, X^e-XIII^e siècles*, Droz. / LETT, Didier (1992), « La mère et l'enfant au Moyen Age » in *L'histoire*, n° 152, février, pp. 6-14. / LETT, Didier (2000), *Famille et parenté dans l'Occident médiéval, V^e-XV^e siècle*, coll.<Carré Histoire>, n° 49, Hachette. / RICHÉ, Pierre (1979), « L'enfant au Moyen Age » in *L'histoire*, n° 18, décembre, pp. 41-50. / RICHÉ, Pierre, ALEXANDRE-BIDON, Danièle (1994), *L'enfance au Moyen Age*, Seuil / Bibliothèque nationale de France. なお、アリエス(1960)以後30年間に於ける研究史に関しては、J・ベルリオツツ(1992)が総括している。
- (2) 中世文学における子供・子供期に関しては、他に以下の文献を参照した。*L'Enfant au Moyen Age. Littérature et Civilisation* (1980), *Sénéfiance*, n° 9, Publication du CUERMA, Université de Provence / Champion. / LODS, Jeanne (1960), « Le thème de l'enfance dans l'épopée française » in *Cahier de civilisation médiévale, X^e-XIII^e siècles*, éd. par Centre d'Etudes Supérieures de Civilisation Médiévale, n° 3, Université Poitier, pp. 58-62. / Suard, François (1980), « Le fils dans les lais anonymes » in *Le récit bref au Moyen Age. Actes du Colloque des 27, 28 et 29 avril 1979*, éd. par D. Buschinger, Centre d'Etudes Médiévales / Champion. / 川口陽子 (1994), 「マリー・ド・フランスの『レ』における親 (parents)」 in 『EBOK』第6号, 神戸大学仏語仏文学研究会, pp. 9-26. / 川口陽子 (1995), 「『と

ねりこ』における「愛」——「男女の愛」と「母の愛」 in 『EBOK』第7号, 神戸大学仏語仏文学研究会, pp. 5-25. / 川口陽子 (1998), 「12, 13 世紀の作者不詳の『レ』における親」 in 『EBOK』第9号・10号合併号, 神戸大学仏語仏文学研究会, pp. 11-28. / 川口陽子 (1999), 「12, 13 世紀の作者不詳の『レ』における親 (II) ——親としての役割を引き受けない登場人物達を巡って」 in 『名古屋仏文学会論集フランス語フランス文学研究 Plume』第4号, 名古屋仏文学会, pp. 33-39. / 傳田久仁子(1996), 「*Lais anonymes* における所有と暴力」 in 『Lutèce』第26号, 大阪市立大学フランス文学会, pp. 1-15. / 傳田久仁子(1997), 「異類婚における「所有」——十二, 三世紀の作者不詳のレから——」 in 『フランス語フランス文学研究』第71号, 日本フランス語フランス文学会, pp. 3-13.

- (3) Doris Desclais Berkvam, *Enfance et maternité dans la littérature française des XI^e-XIII^e siècles*, coll. <ESSAIS>, n° 8, Champion. 1981, p.10.
- (4) フロワールとブランシュフルールには, ベルトの他に, 息子ゴドフロワと娘アエリトがいる. さらに彼らには, 物語の最後 (v. 3440) に三女が誕生し, その娘はコンスタンスと名付けられる.
- (5) シモンとコンスタンスには, 二人の娘達の他に息子が二人いる.
- (6) その他に, シャルル・マルテル, その妻と息子である若き日のペパン, 及び, フランス王ペパン, 偽王妃アリストと二人の息子達ランフロワ, ウドリが登場する. また, ブランシュフルールがパリへ向かう途中で出会った農夫は, 彼女に偽王妃の悪政について訴える時, 妻マルガンと小さな子達について言及している.
- (7) R・コリオ (1970) は, ベルトの母ブランシュフルールについての分析の冒頭で, 次のように述べている. 「物語の筋全体が, 二人の女性の登場人物達によって導かれており, 些細な新展開においても, 彼女達に拠っている. それは二人の母親達, その各々が, 自分の娘を守る, あるいは娘の復讐をする. 彼女達はあらゆる点で対立している, そして, まさに彼女達の敵意のこもったパラレルな行動から, 物語の全ての大波乱が生じる. 母性の真の決闘が問題となっているのだ」 (Régine.Colliot, *Adenet le Roi « Berte aus grans pies » Etude littéraire générale*, tome II, Editions A. et J. Picard, 1970, p. 182). ここで指摘されている2人の母親達とは, ブランシュフルールとマルジストのことである.
- (8) Albert Henry, « Introduction » in Adenet de Roi, *Berte as grans piés*, édition critique par Albert Henry, coll. <T.L.F.>, n° 305, Droz, 1982, pp. 34-35.
- (9) ベルトの娘および息子シャルマーニュについても語られてはいるものの, それは後日談としてであり, 母としてのベルトに関する描写はなく, したがって, 本稿では

母としてのベルトは取り上げない。

- (10) フロワールは「母に似るのだ」(v. 139)に続けて、「貧者にとって過酷で、辛辣であってはならない。／むしろ優しく、気高く、良き気質を備えるのだ。／そなたから善意が、神に、そしてこの世に現れるようにするのだ。／というのも、そうする者は、大層立派に見えるからだ。／そして善をなさぬ者は、最後にその報いを受けるのだ」(vv. 140-141)と述べている。この言葉は、「下層民に対する慈悲と心の善良さ」(Régine Colliot, *op.cit.*, p. 183)を王妃としての「義務」と考える、王妃としてのブランシュフルールの自覚を表すものでもある。それを思い出す時、偽王妃の行動が、模範からいかにかけ離れているかが理解され、それだけに一層、娘を正さねばならないという、ブランシュフルールの決意の程が伺われる。
- (11) *Ibid.*, p. 182.
- (12) *Ibid.*, p. 187.
- (13) *Ibid.*, p. 201, p. 217.
- (14) *Ibid.*, p. 241.
- (15) *Ibid.*, p. 182.
- (16) *Ibid.*, p. 201, p. 217.
- (17) *Ibid.*, p. 241.
- (18) Cf. *ibid.*, p. 201.
- (19) *Ibid.*, p. 201.
- (20) コリオ (1970) はこの箇所に関して、次のように述べている。「アリストはとりわけ富を望む、しかし、マルジストは悪のために悪をなすことで、さらに幸福になる。(……)マルジストは悪を犯すことに、あるいは悪を犯させることに、そして、無実の人々が苦しむのを目にすることに、真の悦楽を感じている。暴君の伝統的なメンタリティに恵まれた彼女は、悪魔的な霊によってさらに住み着かされている。元奴隷の彼女自身、今度は彼女が下層民を苦しめることに、何らかの邪悪な喜びを感じているということもあるかもしれない」(*ibid.*, p. 208)。このような犯罪者としての喜びを感じるマルジストの姿は、成り上がる娘を目にして喜ぶ母としての一面と相反するものではなく、一人の人物が兼ね備えるもう一つの顔であり、両者は共存可能であると考ええる。
- (21) *Ibid.*, p. 209.
- (22) その他には、森の中の礼拝堂から帰る (v. 2645) 時、娘を見出した喜びに満ち溢れるブランシュフルールによって抱きしめられる (vv. 3193-3195) 時、褒美を与えるペパン王の前で跪く (vv. 3218-3219) 時、ベルトが立出する (v. 3252, v. 3293) 時、娘達は

母の側にその姿を見出される。

- (23) ファーボルク (1997) は、シモン一家について次のように指摘している。「『ベルト』において、娘達イザボーとエグラントが話題に上る度に、彼女達は母コンスタンスの娘であり、一方、二人の息子達（名前なし）は父の息子であると、テキストは言う。4人の子達が異母腹ではないと推測させるものは何もない、そしてそれ故にそれは、母・娘間の絆が母・息子間の絆よりも密接である——それは父・息子間においても同様である——という証拠なのである」(Jens N. Faaborg, *Les Enfants dans la littérature française du Moyen Age*, coll. <Etudes Romanes>, n° 39, Copenhagen, Museum Tusculanum Press, 1997, p. 333.)
- (24) Régine Colliot, *op.cit.*, p. 217.
- (25) ファーボルク(1997)は、母と幼子達との間の緊密な関係を描写する例の一つとして、このアリストの台詞を引用している。 Cf. Jens N. Faaborg, *op.cit.*, pp. 201-202.
- (26) Régine Colliot, *op.cit.*, p. 225.
- (27) *Ibid.*, p. 225.
- (28) *Ibid.*, p. 225.
- (29) *Ibid.*, p. 223.

使用テキスト

Adenet le Roi, *Berte as grans piés*, édition critique par Albert Henry, coll. <T.L.F.>, n° 305, Droz, 1982. 本テキストにおける指摘箇所、引用箇所に関しては、その後に行数のみを記すことにする。なお、引用中の丸括弧は引用者による補足、角括弧は引用者による訳注である。

引用文献

- ARIÈS, Philippe (1960), *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, 2^e éd., Seuil, 1973. (フィリップ・アリエス (1980), 『<子供>の誕生——アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』, 杉山光信・杉山恵美子訳, みすず書房.)
- BERKVAM, Doris Desclais (1981), *Enfance et maternité dans la littérature française des XI^e-XIII^e siècles*, coll. <ESSAIS>, n° 8, Champion.
- BERLIOZ, Jacques (1992), « Le retour de l'enfance » in *L'histoire*, n° 152, février, pp. 10-11.
- COLLIOT, Régine (1970), *Adenet le Roi « Berte aus grans pies » Etude littéraire générale*, 2 vols, Editions A. et J. Picard.
- FAABORG, Jens N. (1997), *Les Enfants dans la littérature française du Moyen Age*, coll. <Etudes

Romanes>, n° 39, Copenhagen, Museum Tusulanum Press.

(文学部非常勤講師)